

2018 年度「連携総合ゼミ」学生アンケート 結果の国内と海外学生の比較による考察

松井由美子¹⁾、村田憲章¹⁾、桑原桂¹⁾、山口智¹⁾、
佐藤晶子¹⁾、淡島正浩¹⁾、真柄彰¹⁾

1) 新潟医療福祉大学 連携教育研究センター運営委員会

【背景・目的】 N 大学では開学当初から QOL サポーターの育成を理念に掲げその一環としてチームアプローチができる人材育成を目指している。連携科目のうち、4 年次の「連携総合ゼミ」は集大成となる科目に位置付けられ、毎年国内外からの学生が大勢参加し、近年特に海外からアジアの国々を中心に参加が増え続けている。国際交流委員会との連携もあり、毎年フィリピンから 2 大学、台湾から 2 大学の学生の参加があり、2019 年度の連携総合ゼミにはさらに台湾から 1 大学、マレーシアとスリランカからは教員が見学目的で参加されさらに国際化が進んだ。

毎年実施している事前事後のアンケートの他に全教員及び学生を対象として終了時アンケートを実施している。本研究では 2018 年度の終了時学生アンケートをもとに国内と海外の学生について比較分析を行ったので報告する。

【方法】 連携総合ゼミの最終日 2018 年 9 月 7 日（金）に終了時アンケートを実施後、統計ソフト IBM SPSS Statistics Ver.25 により平均値の比較を実施し分析した。

【結果】 学生用終了時アンケート配布 150 枚、回収 109 枚、回収率は 72.7%であった。システム欠損値 7 枚を除く 102 枚を分析対象とした。

表 1 回答者の所属大学

所属大学	度数	%
新潟医療福祉大学	69	63.3
新潟薬科大学	3	2.7
日本歯科大学短期大学部	6	5.5
日本歯科大学	4	3.7
新潟リハビリテーション大学	6	5.5
国内大学計	88	80.7
アンヘルズ大学	2	1.8
サントマス大学	3	2.8
国立陽明大学	4	3.7
中山医学大学	5	4.6
海外大学計	14	12.9
合計	102	93.6
システム欠損値	7	6.4
合計	109	100

表 1 に回答者の所属大学、図 1 に項目別得点の国内と海外の学生比較の結果を示した。項目 2 と項目 9 のみ海外学生の平均値が低かったが多はすべて高値であった。

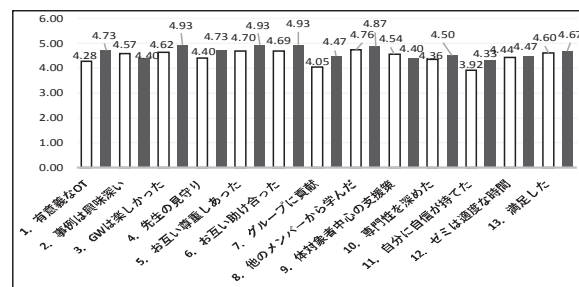


図 1 国内・海外学生の平均値の比較 (■海外学生)

独立サンプルの検定を表 2 に示した。母平均の差が有意に示されたのは表 2 の 4 項目で、1、3 の項目は海外学生が 1%以下で有意に高値を示し、6、7 の項目も同様に 5%以下の確率で有意に高い値であった。

表 2 独立サンプルの検定

項目	F値	有意確立	t値	自由度	有意確立(両側)
1.有意義なOT 等分散を仮定しない	0.004		-3.156	29.645	0.004
3.GWは楽しかった 等分散を仮定しない	0.000		-3.534	41.416	0.001
6.お互い助け合った 等分散を仮定しない	0.001		-2.680	43.254	0.010
7.グループに貢献 等分散を仮定する	0.133		-2.230	100	0.028

【考察】 有意に海外学生が高値を示した「オリエンテーションは有意義であった」は 1 か月前の事前オリエンテーションに海外学生は参加できないため、不十分であると危惧されたが、参加後事例担当教員から個別に丁寧な説明と英語版のガイドが準備されているため支障はなかったと思われる。

「GWは楽しかった」と「お互いに助け合った」の 2 つの項目は海外学生が最も高得点を示し、特に国内と海外の学生が共に GW を行う上で言葉の壁や文化の違いを乗り越えながら理解し合うことに想像以上に国内の学生は苦勞するのに対し、海外学生はスムーズに対処できる能力が高いことを示している。英語が不得手な国内学生が海外との混成チームに入るとストレスを感じ得点が低くなる場合が多いが、海外の学生の負担は少なく、GW では常に積極的に意見を述べ、リーダーとしての力を発揮することも多く国内の学生にも良い刺激を与えていると思われる。

「グループへの貢献度」は「自分に自信が持てた」の項目と同様に毎年低値を示す項目であるが、海外学生は有意に高得点を示し、短いゼミ期間にもかかわらずチームワークの楽しさや貢献できていたと感じていた。

国内学生と比較して海外学生の得点が低かったのは「事例は興味深い」と「対象者中心の支援策」で、国内の事例がほとんどであることから海外の学生になじみやすい事例が少なく、今後検討すべき課題であると考えられる。

【結論】 全体的に海外学生の得点は高く特に「オリエンテーションが有意義」や「GWの楽しさ」、「お互いに助け合った」、「グループに貢献できた」の 4 項目については海外の学生が国内の学生に比べ有意に高かった。しかし「事例の興味深さ」や「対象者中心の支援策」は課題となった。